

大陸(満州)

兵士たちのノモンハン事件

兵庫県 大原松市

私は、福岡県小倉連隊区で徴兵検査を受け、見事、甲種合格です。昭和十二年七月のことです。

昭和十三年一月十日、島根県浜田市浜田歩兵第二十一連隊に入隊、第三中隊に配属になり、百三十名の初年兵と共に三カ月の訓練を受けました。五月上旬、若干の初年兵を残留要員として残し、大部分の兵は中支戦線に出発しました。

家族は、両親と兄と弟が四人、妹が三人で家業は農業です。生まれは大正六年七月十日です。小倉での同

年兵・同級生はほとんどおりませんでした。

後日、我ら残留部隊は浜田連隊を後に当時の広島文理科大学に向かい、北海道から沖繩までの各連隊から集まった兵で独立混成歩兵第七十一連隊を編成しました。連隊長は岡本大佐です。

五月、宇品を出航、三日後、満州国大連に上陸し、民家で一カ月滞在の後、満鉄で北上、ハルビンで三カ月間の駐屯を経て興安北省海拉爾へ落ち着きました。零下三〇度の寒さの中で昭和十四年の正月を迎えました。鼻毛も吐く息も凍る極寒零下五〇度近い寒さ。手足は必ず覆っていないと凍傷です。四月となり五月となると寒さも緩み、草木も芽をふき、リスなどの小動物の姿も見えはじめました。

一月初めころから五月にかけて外蒙軍の越境により

満軍との小競り合いが起き、日本軍の出勤となり、ソ連軍と全面衝突となったのです（ノモンハン事件）。

当時は私も一等兵で大局が分かるはずもないのです。

満軍だけの応戦では敵の攻撃を持ち耐えられなくなり、五月十日、第三十二師団長は東騎兵一個大隊・山形歩兵一個大隊にノモンハン出動下命。ノモンハン戦線へ第七十一連隊も第十二飛行団の無線の警備に第三大隊から一個分隊、第二大隊からも一個分隊を派遣しました。通信隊の車で一路ノモンハンの戦場へ南下、途中異常なく任地の満軍の騎兵小隊の国境警備廠舎に到着。通信隊はこの任務につき、我々は騎兵と共に警備に当たりました。

五月末日、サイドカーに乗った特務機関の少佐が息荒く、東騎兵部隊・山形部隊が敵の猛攻撃に遭い、ほとんど全滅とのこと。無線上のトラック出発準備完了を待ち我ら警備兵も同乗しました。

ノモンハンに到着し、目に映ったのは敵の猛攻を受け肉薄攻撃を加えたが多勢に無勢、勝てる道理もなく多数の戦死者、戦闘力のない負傷者を出した友軍の姿

でした。その戦場を見て胸が詰まる思いでした。日本軍の第一戦司令部があったと聞いていた將軍廟にと急いで引き揚げますと、そこは敵の猛砲撃で破壊尽くされ、我が軍の敗北は明らかでした。その後の情報でソ連軍は撤退した模様でした。

日本軍は戦場の掃除を終えて、復帰命令によりノモンハンから海拉爾まで陸路二百キロの道を車両に乗り、砂塵の中を力なく変わり果てた姿で辿り着きました。昭和十四年五月一日から五月三十一日の間が第一次ノモンハン事件です。

一カ月も経った六月、第二十三師団にノモンハン出動命令が下りました。我が第七中隊も刃付帯剣ほか弾薬・被服・野戦食糧などが支給になり、準備万端を整え待機していました。

野戦輸送隊の自動車が集結し、第一大隊から逐次乗車、敵のミグ戦闘機に注意しながら二百キロの道を日本の戦闘機の援護の下、ノモンハンの西二〇キロのバルシヤガル高地に全員元気で到着しました。休む間もなく陣地構築です。第七中隊は、越境して来るソ連

軍を迎撃のためハルハガ河床の戦車道爆破の命を受けました。決死隊の工兵を中隊をあげて援護しました。

視界零の払暁、目標はハルハガ河約五キロの前方、決死隊の工兵を中心に前進しました。目的地に近いと思つたとき、横にいる戦友から停止の合図、工兵は爆薬物を持って前進し、目的地で点火をすませました。

六月上旬のことです。目的を達し、暗闇の中を反転し元の陣地まで戻ってきたころには、夜が明け始めていました。

昭和十四年七月一日行動開始、暗闇の中を前進し、二日の黎明、工兵隊の準備した鉄船に乗り、対岸で上陸しようとしたが、岸の柳が接岸を妨げるので一斉に飛び込み上陸しました。散発的な銃声が聞こえてきました。

突然、榴弾が炸裂しましたが、幸い犠牲者はありません。午後になると敵兵の数はますます増強し、各部隊三方から包囲され、飛行機・戦車を伴う猛攻撃に曝されました。その都度反撃しましたが、敵は続々と機械化部隊を動員して反復攻撃を執拗に繰り返します。

機械化部隊の威力をまざまざと見せつけられました。夕暮れを待ち工兵の仮設した橋を渡り、第二十三師団は反転してハイ高地に転出し態勢の立て直しを計りました。この戦闘で故郷の戦友、岡本操上等兵を亡くしました。

七月五日、大隊はハルハガ河左岸のノロ高地に陣をし敵を攻撃、撃滅せよとの命を受け、戦闘準備に入りました。七月の真夏の太陽は容赦なく照りつける。主体の水分は一滴残らず蒸発した感覚。一日中波状形の砂漠を徒步行軍していると心身ともにおかしくなってきました。暑い、ともかく暑い。部隊は一時小休止、このとき、機関銃中隊の戦友、大石重実上等兵が缶の水を担いで前を通る。「大原、飯盒を出せ水をやる」「有り難う」二人で七月三日に戦死した岡本君の思い出話の後、「お互いに頑張ろうや」と別れたが、翌日、大石君も戦死、余りにも呆つ気無い前日の別れでした。ノロ高地攻撃前のホルステ河の渡河前後の戦闘は飛行機・戦車と日本軍の肉弾の戦闘です。五月の昼ごろ、敵の歩兵の大部隊と遭遇、三時間余の激戦、続いてソ

連軍の爆撃機が数十機飛来し爆弾投下、我々は爆撃でできた穴に入り難を避けました。このとき、爆撃機護衛のミグ戦闘機が現れ上空で日本の戦闘機と激しく空中戦、この空中戦は日本の勝利となり敵機は去りました。再び敵の戦車が六〇台余り砂塵をあげこちらにやってきました。我が軍は速射砲と火炎ビンにより応戦しました。速射砲をトラックの荷台に乗せ戦車を一台また一台と着実に破壊しました。しかし、トラックに命中して火を吹くものも出ました。歩兵が手伝い速射砲を素早く荷台から引き摺り下ろし、トラックから引き離し、再び速射砲は戦列に参加しました。

敵は正確な我が軍の速射砲に恐れのか右往左往しています。これを目がけ我が火炎部隊は火炎ビンを投げ数十台攔座させ撃退しましたが、我が軍の戦力も激減しました。

大波状形の丘の上の敵は馬鹿に今日はおとなしい。嵐の前の静けさとも思う。小休止の後、弾薬・糧秣・飲料水など、次の戦闘の準備をしました。

翌日いよいよノロ高地への進軍です。敵は大波状地

に陣し、我が軍は小波状地で戦闘には不利な地形でも四〇度を超す炎熱は彼我的水分を容赦なく吸収しました。

昭和十四年七月七日、総攻撃開始です。情報が事前にも漏れたのか敵の反撃は頑強で、逆に攻撃をかけてくる始末。第七中隊の正面の敵も退却せず頑として攻撃してきます。三時間余りの攻撃の結果、敵は退却を開始し、中隊はこれを追撃しました。第七中隊が第八中隊より前進し、第八中隊が第七中隊を敵と勘違いして攻撃してくるので急いで日の丸を振り、撃ち合いにならずにすみました。

これは敵の予定の退却で我が軍が畏に嵌まったのです。次の戦闘開始の十四時半ころから敵の七十五ミリ砲と水冷式マキシム重機砲が火を噴き始め、アーツと言う間に中隊は約半数の犠牲者を出しました。

七月八日、激戦の末ノロ高地の一部奪取に成功。七月七日、八日のノロ高地への総攻撃は多大の戦死傷者を出しましたが一応の勝利を収め、次の戦闘の準備に入りました。

(註)戦後知ったことですが安岡支隊の哈爾哈河岸攻撃は優勢な敵の砲兵・戦車のため攻撃不成功、七日から兵力を増強し再攻したがこれも失敗。二十三日から二十五日にかけて行われた内山砲兵団によりホルステン河兩岸の敵陣地を攻撃したが、これも不成功。不成功というより敗北でした。敵の機械化部隊に敗北したのです。

昭和十四年七月七日、八日。攻撃したノロ高地の丘は大波形状の丘で波の高さは十メートルから十五メートルの高さがあり、その丘の麓まで前進し、その丘を一気に乗り越え前進を続けました。高い所に辿り着くと、全面の二基のマキシム重機関銃が間断なく射撃をしています。その射撃の合間を縫い、丘を乗り越え凹地に転がりこみました。全面の敵からは死角です。何とか目の前の丘の頂まで這い登り、そこに軽機を据え一気に敵陣に打ち込もうと考えるのですが、何しろ体がいふことをききません。そのうち、道に迷い他の波形状と波形状の間の凹地に出てしまいました。

頭を上げると、谷の奥の左側から敵の重機がこちら

に照準を定めています。突然銃声がしました。「伏せろ」と怒号すると同時に、棒で全身を殴られた感じでその場に倒れてしまいました。ふと、我にかえると大腿部から出血しているが痛みは不思議と感じません。

戦友が引き摺りながら後に退いてくれました。そこは完全に遮蔽され弾のこない凹地です。分隊は一時停止し他の分隊と連絡をとろうとしましたがとれません。分隊長が後方に伝令を直ちに出しました。総攻撃というので我が分隊は目標に向かい約二キロ前進していたのです。

他の分隊は、小隊は、中隊はと不安が頭の一遇をよぎりました。伝令が帰隊し、「今日の総攻撃は中止。分隊は中隊本部の位置まで撤収せよ」の命令を伝えました。

落胆と安堵と怒りで全身が震えました。私は痛みがひどくなつたので三角布を緩めます。すると足の先まで血が通って出血する。綿のような血が出てくるが動かなければ血は止まっています。分隊長以下日が暮れてから迎えに来るからの言葉を残して引き揚げていき

ました。痛みがあるから神経はやられていないと安心する反面、一人取り残された心細さがひしひしと感じてきました。

夏の太陽が西に落ち、暗くなっても一向に迎えに来そうもありません。一人で頑張るより外に手が無いと思うと淋しさがどっと襲ってきました。捕虜、自殺、餓死、生といろいろの思いがいたりきたりし一晩中眠れませんでした。

敵は夜になると音楽に興じ、その合間合間に談笑の声が聞こえてきます。彼我にこれほどの差があるのかと愕然としました。

傷口は痛む、夜は更けていく、迎えは依然として来ない。とうとう置き去りにされたとの思いで泣いても泣ききれませんでした。

夜が更けると傷口が痛み出しますが、ヨーチンもありません。そのうち化膿の心配も出てきました。敵の攻撃も心配です。日本軍の常として攻撃前進の折は負傷兵も收容しますが、敗戦退却の折は戦場に置き去られ自殺か行方不明扱いです。そんなことを思い出し、

何とか部隊に合流しようと必死になりました。視界が明るくなるのを待ち行動を起こしました。右足は動かせず左の足で体を支え、両腕の肘を梃子として前進することを考えました。三八式歩兵銃を前の方に押し出し、両腕を交互に前進させ、左足で押し上げて進みます。銃の位置まで前進するとまた前に押し出す。この繰り返しです。

拳銃は安全装置をはずし右手に常に持っていました。右の足は棒のようだったように行動できない。足を曲げれば若干楽になると思い曲げようと努力したが不可能。右足の神経は完全に呆けていてどうにもなりません。腕の力で上半身と下半身を支えて進むので腕も疲れてきて何とか楽な姿勢をと思って動いたところが昨日の重機にまたも発見され弾が頭上を飛んでくる。姿勢を極力低くして時の経つのを待ちました。そして前の行動の繰り返しです。重機は一連の掃射で後はなく、丘の切れ目の敵の死角へ死角へとにじり寄りまりました。

もう大丈夫、夏の真昼は苦しい。傷の痛みを忘れて

の行動でしたが、遮蔽内に来て安堵すると傷口が痛い。三角巾を取り除くと、また傷口が破れ出血が激しく傷口が塞がるまでは動けません。そのうち出血が止まり一安心し、次は歩行と立つ練習に努力しました。銃を杖に立ち上がる練習をすること数時間でついに立ち上がれました。足が曲がらないでも立つ努力が実ったのか、成功したかと踊り上がらなかりでした。

西の傾く太陽を背に、伏せた姿で目前に映る丘は立ち上がってみると、かつて見たような気がする。錯覚かも知れぬが見慣れた丘のようだ。そうだ。元の陣地の一つ前の丘じゃないか。足の痛さも忘れ一気に元の陣地まで辿りつき倒れこみました。「万歳、万歳」と踊り上がらなかりでした。

この陣地には総攻撃のために準備した糧秣の残りの米と水がある。天の助けと早速炊飯にかかりました。ここにはだれがつけたかノモンハン桜という灌木があり、二分咲きくらいの花が咲いていました。木の高さはせいぜい一メートルぐらいです。ノモンハン桜の枯枝を集めて火を付けました。煙が空に棚引きます。そ

の煙を中隊の兵が発見して二人の戦友がすつ飛んできました。

「大原じゃないか」

「そうよ、薄情だな、お前たちは、夜になったら迎えに来ると言っただけでそのままではないか。俺の身になってみる。元気な体ならまだしもこの傷を見てくれ」

思いきり言いたいことを言いました。

「すまぬ、すまぬ、よくその体で十四時間かかって戻ってくれた。今更、言い訳を言っても始まらないが、本当にすまなかった」

中隊の位置の連絡がないので、ホルステン河上流の野戦輸送部隊まで、今晚養生して明晩行動しようと思っただけでいい、そこで収容先を依頼しようとも思っていたとも言ってやりました。

戦友の一人が中隊に報告に帰り、もう一人戦友を連れて帰ってきました。中隊長の命令だから本部に戻ろうと言うので、食事が終わるまで待つてほしいと頼むのを無理矢理に両方から支えられ片足で本部まで行きました。隊長に負傷から今までの経過を逐一報告、ご

苦勞と勞いの言葉がありました。「明日、指揮班から後方の輸送部隊に連絡兵が行く、民間機二機が迎えにくる。六人乗りなのでそれに乗り込むように」とも言われました。小型機でしたが離陸数十分で海拉爾飛行場に着陸しました。病院の救急車で海拉爾陸軍病院に入院、白衣の人になりました。胸の赤札で緊急治療を受け三週間で退院、原隊に復帰です。

連隊の留守部隊は各中隊とも五〇名を欠く始末で、衛兵勤務のみで訓練のない毎日です。九月初旬、第七十一連隊全滅の報で各中隊から一人ずつ計六人が緊急出動、引き続き約百名の兵が到着しました。野戦輸送部隊のトラックで二百キロの道を突破、ノモンハンに到着する。

初期出動した時は十六個中隊の連隊も、三カ月の激戦で飛行機・戦車に叩かれ、戦鬪に耐える将兵は二百五十名程度で重機・軽機も使えるものはほとんどありません。肉弾攻撃・肉薄攻撃のいかに凄かったかを見せつけています。応援の百名と合わせて三百五十名、これでは戦っても全滅です。

師団長は兵の上から双眼鏡でじっと敵陣を見つめています。連隊将校から「大原、お前師団長の近くで様子を見ていてやってくれ」の命令で三日ほど当番の真似事をした思い出もあります。師団長の万一を慮んばかつての配慮だったのでしょうか。

関東軍は再攻撃を期し、四個師団を動員し、また全満の野砲・速射砲を集結中に、停戦協定が成立し、第二次ノモンハン事件に終止符が打たれました。昭和十四年九月十五日のことです。

(註)ノモンハン事件はソ連軍又は日本軍の威力偵察だったのか、日本の南進論・北進論のあたりを受けた予備戦争だったのか、今もって分かりません。

膨大な犠牲を出したのに、教訓を学びとっていません。特に空中戦、戦車戦等に関してその観を深くします。日本軍の戦略・戦術は日露戦争当時から一步も進歩していないと言われていますが、そのとおりだと思います。よく生還したと深い溜息が出ます。